

国際的な開示フレームワークにおけるKPI



国際統合報告評議会 (IIRC)
テクニカル・マネージャー

三代 まり子
Mariko MISHIRO

2011年よりWICI (世界知的資本・資産イニシアティブ) のメンバーとして国際統合報告評議会 (<http://www.theiirc.org/>) の事務局へ参加。テクニカル・マネージャーとして国際統合報告フレームワークの開発に従事。米国公認会計士 (カリフォルニア州)。

注目集まる「統合報告」

企業の情報開示に関する国際的な議論としてIIRCが進めている「国際統合報告フレームワーク」による開示、いわゆる「統合報告」に注目が集まりつつある。財務資本をはじめ企業内外のあらゆる資本がどのように有機的に組み合わせたり、価値を創造しているかのプロセスを記述する、より包括的なビジネス報告である。

昨年IIRCが公表したディスカッション・ペーパーで、開示を行う際の前提となる考え方として5つの「開示原則」が示された。その一つ「情報の結合性」では、「戦略が、主要業績評価指標、主要リスク評価指標および報酬にどのようにリンクするか」という論点が挙げられ、統合報告における情報間の結合性を高める重要な要素としてKPIが位置づけられている。

KPIと比較可能性

財務数値やKPIをはじめとするあらゆる数値化されたデータは、比較・分析に利用してさらなる価値を生み出す。ディスカッション・ペーパーでは、この「比較・分析技術の改善」は投資家側の課題の一つとして指摘されている。まず、投資分析に有用な開示を進めるには、①企業間②過

去と現在③計画と実績——という3つの比較が可能な状態を考慮する必要がある。これらの比較可能性の前提として、企業が意図する用語や数値の意味を投資家が正しくかつ容易に解釈できるように開示する必要があり、そのためには企業と投資家の間で共通の「辞書」の役割を担う開示基盤が必要となる。

開示における技術的基盤の一つであるXBRLでは、「辞書」の役割はタクソノミーが担い、開示される用語や数値について、その本質的な意味と紐付けるとともに、2つ以上の開示要素間の関係性も定義できるようになる。データが技術的にタグ付けされると、それらのデータ自体が情報として活用できるばかりか、情報間のリンク付けが時間軸を超え、またさまざまなコミュニケーション媒体を超え容易に行える。

たとえば、あるKPIについて、その定義や計算式、戦略との結びつきが表面上の開示事項に付帯して電子的に別途書き込まれているため、投資家は目的ごとに縦横無尽にデータにアクセスし、比較・分析を行い、独自の観点から情報をカスタマイズして意思決定に活用できる。投資家がどのデータを選択し比較を行うかは、比較の目的と時点によってさまざまであり、また、情報の活用能力によっても異なってくる。

したがって、すべての企業にとって共通の指標はなく、画一的なKPIの開示は必ずしも比較可能性を高めることにはならない。各投資家の比較・分析の「切り口」に柔軟に対応できるデータ提供の仕方がより重要となる。XBRLによりタグ付けされたデータが活用できれば、前記3つの比較をより早く正確に行えるようになる。

KPI活用の留意点

KPIを活用する比較・分析において企業が留意すべきことは、「一貫性」である。経営の実態が変わらぬ限り、同じKPIの継続開示は企業の信頼性を高め情報価値を強化する。企業を取り巻く機会やリスクの影響により経営環境が変化し、戦略が変更されるとき、KPIの変更も必要になる。戦略の変化と結びつけて開示されるとき、KPI変更の妥当性とナラティブ情報の信ぴょう性が担保される。また、投資家に求められるKPIの解釈や活用における留意点は、KPIだけを断片的に比較するのではなく、開示内容の文脈に即した評価が求められる。

将来情報を含む企業価値創造の全体像をより長期的な視点から評価して、投資意思決定のためにKPIが活用されることが望まれる。